

では、皆様、さようなら。

第十六話 魂のいのち

皆様、秋もようやく深く深まって来たようです。秋は思索の秋と言われます。生きることのわずらわしさに心奪われて、ともするとあまりにも物思うことの少ない一日一日が過ぎて行きます。でも秋はものを思わせるのです。ふけ行く秋の夜、静かに、過ぎた年月を、そしてまた私たちの行末を考え、生きている私の生命いのちがこれだよいかと反省するのも、秋の聖い仕事の一つでありましょう。

さて、先週は中休みの意味でちょっとした思い出話をいたしました。これからまたしばらく、私たちの幸福探求の思索の旅を続けることにいたしました。

私たちは、私たち人間というものの持つ複雑さを掘り下げて、人間の本質を理性的動物——すなわち動物的な生活の主体としての物質である肉体と、理性的活動の主人公としての魂、あるいは靈魂といわれるものとの結合——であると見ることによって、私たち自身の生命の第一のなぞを解いたのですが、今しばらくこのなぞの鍵を他のすべてのなぞにも当てはめてみましょう。

私たちはすでに、富み栄えるということが、ただそれだけでは決して人間を真の意味において、幸福にはしてくれないことを見ました。またただ支配欲という本能にかられて、術策によって勝ち得た権力というものも、更には、異性と無軌道な性関係で、人間の持つ性欲の本能を存分に満たし得たとしても、それだけで人間はしあわせにはならないことを考えました。動物なら、それでよいのです。食物と寝る場所と、そして生理的な本能を満たす手段とが与えられてさえいるなら、動物はそれで満足しています。けれど人間はそれだけではしあわせにはなれないのです。

なぜだろうか？ と、問うまでもありません。いつかも申し上げた通り「しあわせ」とは満ち足りることです。充足することです。私たちの生命が満ち充つることです。とするなら、どんなに身は富み栄え、位は人臣の限りを尽くし、愛妾に取り囲まれて性の悦楽をほしきままにしようと、それで人間がしあわせであるはずがないのです。なぜなら、そのとき満ち足りているのは、動物としての肉体の部分だけであって、人間を形成するもう一つの面、すなわち、魂が満たされていないからです。

満ち足りた魂のいのち……存分に満ち足りて、内に光と力と熱とを蔵した輝くばかりの魂のいのち……それを掴まぬ限り、人間は、人間のすべてが人間として満ち足りたとは言えないのです。し、何としてでも、その魂の満ち足りた生命を生きぬ限り、人間はしあわせにはなれないのです。ちようとお腹がおいしいごちそうでいっぱいになった時の満ち足りた食後の満腹感と同じように、人間の魂も精神的な、より高尚な靈的糧かたによって内に満ち溢れる充足感を求めています。ああ、それこそ人間が生まれ落ちた瞬間から、オギャーと泣く呱呱の声に始まる人生の旅路において、飢え渇くがごとくにあえぎ求める幸福なのであり、最後の息を引き取る間際まで、この充足を求めて幸福を探し求める行脚の旅を続けるのが、すべての人間に課せられた宿命なのであります。

皆様はレーニンの言った「宗教はアヘンである」という有名な言葉をご存じでしょう。徹底した唯物思想の上に組み立てられた共産主義という一つの社会機構は、人間精神の存在を否定し、魂の充足という幸福感を抹殺して、人間をただの動物と見なすことによって、その論理を展開しているのです。現代の世相の中にじみ出ているすべての不幸を、資本主義という一つの社会形態の罪に帰し、この誤った社会機構を闘争によって打ち破り、搾取者も被搾取者もなく、すべての人々が富を平等に分配されるという共産世界を打ち立てることによって、人間を幸福にしようとしています。

もちろん、私は資本主義の持つ欠陥を否定するものではありません。のみならず先ごろなくなられたローマ法王ピオ十二世と共に、カトリック教会は資本主義世界における個人財産の使用権

の濫用を糾弾し続けて参りました。けれども、現代の人間のすべての不幸の原因が、ただ社会組織の欠陥だけにあると主張する説には、私は賛成できないのです。

共産主義は富の平等を主張します。世の中に金持ちも貧乏人もなく、すべての国民が完全に平等な富を持つということは、なるほど、口で言えば、いかにも美しく聞こえますが、こんなことが実際に行なわれるためには、人間の持つ自由意志を根こそぎ奪い取るような恐ろしい警察の強権発動がなければならぬということを理解することは、そんなにむづかしいことではないと思います。たとえば、かりに今、全国民の持っているものを全部取り上げ、改めて全国民に平等な給料を払い始めたと仮定しましょう。人間は自由意志があるのですから、そのもらった給料をどう使うかは、国民ひとりひとりの自由であるはずですが、たとえば、甲はその給料一杯の生活をして、何も残さぬようじょうずに使い果たすでしょう、乙は何かの思惑があって生活費を極度に切りつめて、少しずつ財産を残すことができますし、丙はお酒を飲みぜいたくな生活をして借金を作るかもしれません。こうして二、三年もたてば、甲は依然として無一物、乙は相当の財産を残し、丙は借金で首がまわらなくなっているでしょう。借金に苦しむ貧乏人と財産を残したお金持ちとが早くも出現して来るわけです。もしも、そういうことがないようにしたいと思うなら、いっそのこと、もらった給料はその月のうちに必ず全部使い果たさねばならぬ。さもないと監獄にぶち

込むぞという法律でも作って、警官が目を光らせていなければならぬでしょうね。

それはそれとして、今、かりに一歩譲って、富の平等ということが、なんらかの方法で実現できたと仮定してみましょう。だが、果たして人間がそれで、どれだけしあわせになれるでしょうか？ 今、階級闘争といって赤旗を振っている人々が、共産主義の世界がでか上がると、そのとたんに、皆、孔子様のように悟りすました聖人になるとでもいうのでしょうか？ 共産主義の世界では、人々は絶対に他人と争わず、けんかもせず、なまけもせず感情に走ることもなく、青年男女は絶対に性的な誘惑に陥らず、結婚した男女は決してよろめくことなく、他人の妻を思うこともなく、警察も監獄も必要のない完全無欠な人間になるとでもいうのでしょうか？

とんでもないことですね。富が平等に分配され、搾取者も被搾取者もない世界が出現したとしても、そのとたんに人間の動物性が抹殺されるわけではありません。人間は依然として、食欲や性欲や支配欲などの本能を持っているでしょう。共産世界においても、青少年は押さえきれない性の衝動に悩むことでしょうし、その衝動のおもむくままに、互いに越えてはならぬ垣根を越えて、良心のかしゃくに悩むこともありましょう。共産世界においても、人々の心には依然として憎しみが宿り、醜い争いが絶えないでしょう。共産世界においても依然として、愛情の裏切りや忘恩やねたみや軽べつなどが、横行するでしょう。共産世界においても依然として、夫婦間の

愛情の冷却や倦怠期が訪れ、そのすき間に乗ずる三角関係などが、人々の心を暗くするでしょう。共産世界においても——科学の進歩によって現在ある流行病などは、影を消すかも知れませんが——しかし依然として、病気が、そして死が不吉な影で人々の心をおびえさせ、愛しあうものを冷酷に引き離して行くことでしょう。今、私たちが持っている、こうした不幸の数々の中で、ただ「貧しさ」がなくなるというだけで、それ以外のすべては依然として、私たちの心をむしばみ続けることでしょう。のみならず、私たちの貧しさがなくなった代償として、今の私たちがせめてこれだけはと大事に握りしめている、ささやかな喜びの一つがなくなるのです。それは「自由」ということです。共産主義世界においては、各個人の自由意志というものは、国家という強大な権力者によって搾取されてしまうのです。ということは「共産主義が着々と効を奏しつつある」と豪語しているソ連の、あの陰惨な国内事情や、自由を求めて立ち上がったハンガリーの不幸な愛国者たちの上に襲いかかったソ連の残虐無比な鉄槌を一目見ただけで、明きらかなことではありません。共産主義陣営に加わった東ドイツから、毎日毎日数千の人々が自由を求めて西ドイツへ流れ込んで来るという事実が、何を物語っているのでしょうか？ それでもなお、人々は富が平等に分配されたから、私たちは幸福だと、うそぶくのでしょうか？

とんでもないことだ！ と、も一度申します。私たちの求めている幸福とは、そんなものではないのです。また、私たちの心をむしばむ不幸とは、そんなことで消え失せるものでもないのです。幸福とは、そして不幸とは、もっともっと内面的なもの、奥の深いもの、いわば人間の魂の奥底の問題なのであります。

もちろん、私は搾取者も被搾取者もない世界、働きたい者にはいつでも職が与えられ、病気になるのは、すべての人が安心して療養でき、生涯の勤労の報酬として安らかな老後を送ることができる……そういう世界が一日も早く来ることを念願しますし、なんとかして国民皆の力で、そういう世界を出現させるべく努力せねばならぬと思います。しかし、それは憎しみや闘争によって、かち得られる世界ではないはずで、また一つの社会機構を国家という強権がむりやりおしつけてでき上がる世界でもないのです。それは全人類が愛しあい、いたわりあい、なごみあう平和な道義の上に始めて築かれる理想の世界なのです。もちろん、それには時間が、かかりましよう。けれど、私たちのひとりひとりが満ち足りた魂のいのちのしあわせを生きているということは、そういう世界の実現への一番近道なのであると同時に、またそれ自身が私たちの今生きているこの現在の生命の目標でもあるのです。ということは、そういう理想の世界が来た時に、始めて人間はしあわせになるというのではなくて、そういう世界を実現しようと、たゆみなく努力しつづける現在においても、私たちはこの環境の中において、今、幸福であり得るので、また幸福

でなければならぬということなのであります。

しあわせは満ち足りた生命だと申しました。けれども、今の私たちには貧しきや病氣や、その他の社会環境から来るところのさまざまな不如意な事柄があって、今すぐ私たちのからだの生命が満たされることができないとしても、せめて、道義的な魂の生命を満ち足らしめることによつて、内面から溢れ出て来る幸福感によつて、肉体の不幸の影をおおうことができるのです。

身は美食に飽き絹に包まれ、高位官職にありながら、しかも心の中にゾツとするような空虚を感じて生きる、うつろな生命ではなく、たとえ、貧しく、またいへぬ病いにさいなまれていようと、心満たされて、ほのほのとした喜びに生きる魂の幸を……ああ、私の生命が、その奥底から、むせびつつあえぎつつ求めていたものは、それなのだったと悟りましょう。そして、この富でも権勢でも快樂でも、満たし得なかつたこの食欲な魂をどうしたなら満たすことができるのかを……皆様、生きる生命は短いのです。その短い貴重な生命の真剣な叫びを、真剣に聞き取るうではありませんか？

虫のすだく声が聞こえます。どうやら秋の夜がふけて来たようです。では、皆様おやすみなさい。

第十七話 ただ一つのこと

生き生きと内面的に充実した魂の生命とはいったいどのようなようにしてつかまえることができるのでしょうか？ きょうからしばらくこの大きな深い問題と取り組むことにいたしましょう。これは確かに大きな問題です。人々は一生に一度は、「真の幸福」となるはずの、この魂の充足を求めはするのですが、それがあまりに大きく深い問題なので、しまいは何だかわけがわからなくなつて、この幸福探求の道をあきらめてしまふようです。けれども、これをつかまぬ限り人間はしあわせになれないとするなら、私たちはどんなことがあっても絶望することなく、この思索の旅を続けねばなりません。ちょうど考えるには一番適当な秋の半ばです。しみじみと自分の心に問いかけながら、ご一緒に私たち自身の魂の奥底に入り込んで行くことにいたしましょう。

さて、魂の生命にはいつかもお話しましたように、知恵と意志という二つの精神的活動の能力があります。そして知恵は知恵のために、すなわち「真理」を追求するために、意志は愛するために、すなわち「善」を欲求するためにあるのです。「知る」ということはうれしいことですね。